

乳児への保育実践力を身につける授業の可能性

—大学内の赤ちゃんサロンに参加した保護者への調査から—

木村 直子*, 塩路 晶子*

(キーワード：保育実践力・乳児・保護者支援・授業)

1. 本稿の目的

近年、幼稚園教諭及び保育士等養成大学や子ども関連学科のある大学においては、子育て支援ルームを保有し、地域社会に貢献している。大学で実施されている子育て支援についての報告も年々増加傾向にあり、各大学が様々な形態や目的をもって展開している。それらの報告は、学生への教育的効果や実践力向上を中心としたものが多く、各大学の紀要などで実践報告として報告されている^{1) 2) 3) 4)}。

本学幼年発達支援コースにおいても、2012年より子育て支援活動を活用した教育プログラムを実施している。本教育プログラムの目的は、乳児とその保護者に、幼年発達支援コースのプレイ・ルームで開催する「サロン」に参加してもらい、学生の乳児に対する保育実践力と学生の乳幼児期の子どもを育てる保護者への支援力を育成、強化することである。これまで4年間の実施の中で、学生の乳児への保育実践力や記録を書く力が格段に向上したことを実感してきた。そこで本稿では、保護者のアンケート調査をもとに、本教育プログラムの在り方とその意義を再考するとともに、学生の乳児を育てる保護者への支援力について考察することを目的とする。

2. 赤ちゃんサロンの概要

大学内で実施している赤ちゃんサロンの取り組みは前報に詳細を記述している(木村・塩路ほか, 2012)。ここでは概要のみの確認に留める。

① 子育て支援活動への参加者

活動開催日に、大学に来ることのできる概ね0歳児及びその保護者10組程度とした。参加者の募集は、「親子で遊ぼう！みんなで遊ぼう！」と題したチラシを作成し、近隣の0歳児の保護者が出入りする機関(大学附属児童図書室・地域子育て支援センター)を通して案内し、個別に申し込みをしてもらった。活動への参加は、対象児の年齢を考慮し、申し込み制のオープン形式とした。

② 活動場所

大学内の演習用の三間続きの一教室を整備し、0歳児とその保護者が安全に活動できるよう十分に配慮した(2014年は人文棟の水道トイレ改修工事のため高島会館で実施)。また、鳴門教育大学「赤ちゃんサロン」(以下赤ちゃんサロン)と命名した。

③ 活動の目的

赤ちゃんサロンの目的は、「乳児を育てる保護者と未来の保育者が、子どもの遊びや成長の喜びをともに経験し、一緒に学び考えていくこと」とし、参加を募るチラシ等にもその旨を記載した。

④ 活動の実施

赤ちゃんサロンの実施は、毎年5月より1月までの月に1回(夏季及び冬季休暇中は休回)、計7回の1年クールとした。赤ちゃんサロンでは、毎回遊びの主テーマを決めた自由遊びプログラムを取り入れた。主テーマを決めた自由遊びプログラムとは、例えば「音あそび」がテーマの回には、参加する子どもたち一人ひとりの状況(前回の子どもの姿を基本に、保護者からの話・年齢・発達・好みの傾向など)に合った音を楽しむおもちゃや環境を準備した上で、用意した遊びを一斉にするのではなく、子どものその日の興味・関心を主軸に遊びを展開させるものである。プログラム活動の開始及び終了時間は、いずれの回も10時45分頃から11時15分頃までのおよそ30分とした。ただし、プログラム活動実施日は、10時から12時30分まで部屋を開放し、活動前後にオムツ替えや授乳、昼食等をともにとれるよう配慮した。

⑤ 安全の確保及び倫理面の配慮

部屋の大きさや安全、授乳・オムツ替えスペースの確保等から総合的に判断し、参加可能人数の上限は15組とした。また、研究及び教育のために、記録(カメラ・ビデオ・エピソード記録)をとることへの承諾や事故・怪我等トラブルへの責任の所在を記した誓約書を、参加者

*鳴門教育大学基礎・臨床系教育部

全員とかわした。さらに、安全面や倫理面での細やかな配慮が行き届くよう、活動実施日には、県内のNPO法人地域子育て支援センターの専門職員にも参加して頂いた。

⑥ 運営

赤ちゃんサロンでの活動は、前期科目の「乳児保育」及び後期科目の「相談援助」・「保育相談支援」を受講する学部生及び大学院生が中心となって計画立案実践している。これらの科目は、幼児教育専修1年生または長期履修の幼稚園プログラムに所属する大学院生に開講された科目である。

3. 保護者アンケート

(1) アンケートの手続き

2012年度、2013年度、2014年度の「赤ちゃんサロン」最終回に、保護者にアンケートへの協力を依頼した。アンケート調査は、自宅でゆっくりと記述して頂き、その後返信用封筒に入れ、投函してもらうようにした。また、調査内容を活動における保護者の記録や学生の記録と照合できるよう子どもさんの名前を記名してもらった。ただし、アンケート調査への回答は自由とし、回答に対する催促や個人的な依頼等は行わないことによって、調査対象者の自由意思を尊重した。またアンケートの内容は研究目的以外に使用することはないことを明記するなど倫理面にも配慮した。保護者へのアンケートは、2012年度が12部（回収率100%）、2013年度は6部（回収率100%）、2014年度は10部（回収率90%）、合計28部（回収率97%）であった。

アンケートの質問項目は、「子どもさんの名前」、「子どもさんの年齢」、「参加した活動日」、「特に印象に残っている赤ちゃんサロンの遊びの回について」、「保護者の方から見て、お子さんは何を楽しんでいましたか?」、「保護者の方から見て、お子さんが何かに困っている様子がありましたか?」、「学生や保育者のかかわりについて、気がついたことを教えてください。」、「1年間、赤ちゃんサロンに参加しているうちに、お子さんの遊びに組み込む様子に何か変化はありましたか?」、「お家での好きな遊びについて教えてください。」、「今後、赤ちゃんサロンをよいものにしていくために、アドバイスをお願いします。」であった。

(2) アンケート結果

1) 子どもの年齢

各年度の子どもの初参加時の年齢について、2012年度は0ヶ月（胎児）から1歳4か月の幅で平均は8.67ヶ月（ $n = 12$ ）、2013年度は4ヶ月から10ヶ月の幅で平均は

7.33ヶ月（ $n = 6$ ）、2014年度は0ヶ月（胎児）から1歳4ヶ月の幅で平均は8.60ヶ月（ $n = 10$ ）であった（表1）。

表1 調査対象の子どもの概要

参加年度	度数 ($n = 28$)	男児	女児	初回参加年齢 (幅)	初回参加年齢 (平均値)
2012年度	12	2	10	0 - 1歳4ヶ月	8.67ヶ月
2013年度	6	3	3	4 - 10ヶ月	7.33ヶ月
2014年度	10	6	4	0 - 1歳4ヶ月	8.60ヶ月
合計	28	11	17		8.36ヶ月

2) 参加した活動日

2012年度、2013年度、2014年度の活動実施日は、5月・6月・7月・10月・11月・12月・1月の7回であった。参加回数は、2012年は3回から6回であり平均は5.6回（ $n = 12$ ）、2013年度は3回から6回であり平均は4.3回（ $n = 6$ ）、2014年度は1回から6回であり平均は4.0回（ $n = 10$ ）であった。多くの子どもと保護者が複数回参加しているが、7回全部に参加できた子どもは3年の活動の中で1人もいない。0歳児は体調の管理も難しく、季節に関係なく1年間を通してどの月も欠席者がいた。

3) 保護者の活動に対する評価

① 特に印象に残っている赤ちゃんサロンの遊びの回について

印象に残っている月は、保護者によって異なるが、初回（5月）や夏休み明けの回（10月）を選択する率は低く、子どもが場所に慣れて落ち着いていた回の方が高くなっている（表2）。

表2 印象に残っている月

月（主テーマの一例）	度数 ($n = 28$)	パーセント
回答なし	2	7.1
5月（オリエンテーションと顔合わせ）	1	3.6
6月（音あそびと散歩）	4	14.3
7月（色あそびと散歩）	5	17.9
10月（なるとピクニック）	1	3.6
11月（落ち葉や木の実で遊ぼう）	6	21.4
12月（クリスマスを楽しもう）	2	7.1
1月（お正月の遊びを楽しもう）	7	25.0
合 計	28	100.0

② 子どもが楽しんでいたと思うこと

アンケートでは、「保護者の方から見て、お子さんは何を楽しんでいましたか?」という質問項目に対して自由記述で回答を求めた。回答の多くからは、子どもの具体的な様子を思い浮かべながら記述されたことが推察され、「わからない」を含む無回答はなかった。自由記述の回答内容をテキスト分析によって細分化し、観点を抽出して

再分類した。その結果抽出した観点は、「手作りおもちゃ」「学生とのやりとり」「プログラム活動」「外遊び」「遊具などで体を動かす」「他児との交流」であった。これらの中で最も多く出現した観点は、学生が毎回担当の子どものために製作した「手作りおもちゃ」であった。次に、「学生とのやりとり」であった。さらに、「プログラム活動の内容」に触れたもの、「外遊び」に関するもの、そして室内に配備している「遊具」について、また赤ちゃんサロンに参加している「他児との交流」が続いた（表3）。抽出された観点の頻出程度と実施年度には統計的な差は認められなかった。すなわちどの年度においても、手作りおもちゃや学生とのやりとりを子どもたちが楽しんでいたと保護者が評価しているといえる。

表3 子どもが楽しんでいたこと（保護者評価）

楽しんでいたこと（保護者評価）	度数（n = 28）	パーセント
手作りおもちゃ	18	64.3
学生とのやりとり	10	35.7
プログラム活動	8	28.6
外遊び	7	25.0
遊具などで体を動かす	4	14.3
他児との交流	4	14.3

「手作りおもちゃ」についての回答には、「学生さんが作ってくださったアイデアいっぱいの手作り楽器。」「手作りのおもちゃで楽しそうに遊んでいた。」「手作りのおもちゃに興味をもち、舐めて遊んでいた。」などが見られた。学生たちは、本活動の実施後の1週間で活動内容を記録したり省察したりする事後評価をし、次の1週間で次の活動の計画を練り、さらに次の1週間で計画を具体化する環境構成を準備し、次の活動開催日がやってくるという流れを1年間繰り返す。その中で、担当の子どもの発達や興味関心にあった手作りおもちゃを試行錯誤しながら毎回準備していた。学生にとって決して時間的余裕があるわけではないが、何とか時間を捻出し手間暇をかけた準備が、子どもたちの楽しさに繋がっていると保護者から評価を得たことは、大きな意味をもっているだろう。

「学生とのやりとり」についての回答には、「学生さんとの関わりが楽しかったようで、親に見向きもせず楽しんでいた。」「最初はあまり動かなかったけれど、学生さんが手遊びをしたとき、学生さんのもとまで動き回った。」「自分が興味を持ったおもちゃで学生さんに遊んでもらってとても楽しんでいた。家での関わりでは、そういう風にできていないことに気付き、とても勉強になった。」「お姉さんたちにいっぱい関わってもらい一生懸命遊んでいた。」「学生さんと関わるのが楽しそうだった。」「学生さんと少しずつ交流できるようになり楽しそうだった。」などである。自分の子どもが学生とのやりとり

を楽しんでいたと保護者に感じてもらえたことは非常に大切なことである。さらに、学生と子どものかかわりを見て、保護者自身が子どもとのかかわりを振り返るきっかけとなったことは、本活動の保護者における意義の一つといえるだろう。

続いて「プログラム活動」についての回答には、「たくさんの落ち葉や紙の入った段ボールの中で遊んだこと。その後、絵本の読み聞かせの時間が始まってなかなか出られなかったくらい気に入っていた。」「フィンガーペインティング。」「生演奏のクリスマスの歌に合わせてマラカスを鳴らしたり、歌をうたったり。」「ヴァイオリンの演奏。」などであった。

また「外遊び」についての回答には、「ベビーカーで散歩したり池の周りで遊んだりして、見慣れない風景に興味をもっていた。」「外遊びを喜んでいて。落ちてくる葉や花をみて、外の空気に触れることが新鮮で、それだけではしゃいでいた。」「大学の庭で外遊びしたとき、太陽の光をあびて気持ちよさそうだった。葉や枝に触れて楽しそうだった。」などの記述がみられた。

さらに少数ではあるが「遊具などで体を動かす」についての回答には、「ぞうの乗り物で遊ぶ。」「体を使った遊び。」「ボール遊び。」などがあつた。「他児との交流」についての回答には、「たくさんのおもちゃと同年代の子どもにとっても興奮していた。周りの子どもの真似をするような行動も出てきた。」「他の子どもさんの様子を見て回りみんなの反応を楽しんでいた。」「参加した最初の頃は学生さんとのやりとりを楽しんでいたが、最終回にはお友だちや月齢の小さい子に興味をもっていた。」といった記述がみられた。赤ちゃんサロンに参加した子どもの中心的年齢は0歳児から1歳児であることを考えると、他の子どもの様子を見つめ、その存在を認めることから始まり、最終回には他児との並行遊びや小さなやりとりの芽が出始めていたと思われる。

③ 子どもが困っていたと思うこと

アンケートでは、「保護者の方から見て、お子さんが何かに困っている様子はありましたか？」という質問項目で自由記述の回答を求めた。50%の保護者は「特にありません」と回答していた。困っている様子を記述している保護者の多くが記述していたのは、「場所見知りや人見知り」など、慣れない環境での適応の難しさであった（32.1%）。赤ちゃんサロンに参加した子どもの月齢や発達段階から、人見知り・場所見知りが出現する子どもがほとんどであった。子どもの人見知り・場所見知りの出現を、保護者が自然なこととして捉えられるように、赤ちゃんサロンでは子どもたちが人見知りや場所見知りによって不安が高まっているときには、保育者は子どもとの距離を一定にとり、子どもが落ち着いたころ合いに

おもちゃをそっと渡すなどした。また「はじめて来たんだもんね、ゆっくりでいいよ。」「お母さんと一緒にいようね。」と声かけをすることで、保護者自身が子どもの様子に焦ったり、無理に子どもを参加させたりすることがないように配慮した。

④ 保育者のかかわりについて

アンケートでは「学生や保育者のかかわりについて、気がついたことを教えてください。」という質問項目で自由記述の回答を求めた。28名全員の保護者が、各々の言葉で学生のかかわりに肯定的な評価を下さった。その内容は、「いつもニコニコして下さって、名前を呼んでくださって、とてもほのぼのとした雰囲気で居心地のよい場所でした。」「いつも温かい笑顔で迎えてくれる。ゆったりとした口調、接し方で、とても居心地がよかった。」「いつも笑いながら子どもに接し遊びの手助けをしてれていた。」のように、笑顔で優しく接することや名前をきちんと呼ぶことなど保育展開における保育者としての基本的な態度が評価され、居心地のよい温かな雰囲気を作り出していたと受け止められている。

「担当の学生さんが子どもの動きをしっかりと見守り遊んでくれた。」「学生さんが娘のちょっとした動きや発言を逃さずよく見てくれている。」「泣いたらすぐに抱っこしてくれた。子どもの目線で楽しいことを探してくれた。」など、学生が子どもと向き合い遊び込むことや子ども理解に基づき応答性を発揮することができていたと評価された。これは非常に重要な保育者としての態度であり、学部1年生を対象に保育実践を行う理由の一つである。目の前の子どもに直面し、子どもの反応からその心の機微を読み取り、応答するという誠実なかかわりを通して子どもと通じ合うことに保育の基本がある。しかし、子どもと通じ合う感覚や子どもと通じ合えない感覚は、子どもと対面し、かかわる中でしか味わえない。すぐ側にいる保護者に、自分の子どものことをよく見て、かかわってくれていると感じてもらえたことは、非常に重要なことである。

さらに、学生のかかわりをみて、保護者自身が自分の子育ての振り返りとなったという記述も見られた。具体的には、「学生さんのかかわりが、自分の子どもとの関わり方の勉強になった。」「いつもニコニコして下さって、名前を読んでくださって、とてもほのぼのとした雰囲気で接して頂く姿を見て、客観的になれ、子どもの尊さを改めて感じた。」「毎日見ていると気にならなかったような小さな成長も『こんなことができるようになったんですね』と声をかけてくれ、色々な気づきがあった。」「いつも笑いながら子どもに接し遊びの手助けをしてれていた。普段家では母が必死になりすぎて笑顔が少なかったなと思いました。」「手作りおもちゃは、本当に有難く、

私も勉強になった。」というものであった。学生らの不器用ながらも懸命な姿が、保護者の子育ての発見や刺激に繋がっていたことを想像させる内容である。

その他には、保護者自身も学生の成長を見守って下さっていたことがわかる記述もあった。「回を重ねるごとに子ども扱いが上手になり、後半には遠慮がちに近寄ることもなくなっていた。」「学生さんが子どもに対してかわいいと思ってくれる気持ちがだんだん強くなっている気がした。」というものであった。

表4 保育者のかかわりについて（保護者評価）

保育者のかかわりについて(保護者評価)	度数 (n = 28)	パーセント
笑顔	3	10.7
優しく接する	6	21.4
温かい雰囲気	2	7.1
名前を呼んでくれる	4	14.3
声かけ	6	21.4
しっかりと遊んでくれる	6	21.4
子どもへの応答性	5	17.9
学生の成長	2	7.1
保護者の気づき	7	25.0
その他	6	21.4

⑤ 1年間の子どもの変化

アンケートでは「1年間、赤ちゃんサロンに参加しているうちに、お子さんの遊びに取り組む様子に何か変化はありましたか？」という質問項目で自由記述の回答を求めた。分からないと回答した保護者が6名あった。それ以外の22名は、赤ちゃんサロンでの子どもの変化や家庭での子どもの変化を具体的に記述していた。

赤ちゃんサロンでの様子の変化については、「だんだん注意深くって人見知りを始めた。周りの子をよく観察しており、おもちゃを渡そうとしたり赤ちゃんの頭をなでたりするようになった。」「最初はお座りだけだったのでものそばでずっと遊んでいたが、成長とともに自分で好きなおもちゃをとって遊ぶようになり、最後の回には私から離れてどんどん遊びに行っていた。」「最初はべったり母から離れられず不安そうにしていたが、回を重ねるごとに笑顔が増えて安心して遊べるようになった。家庭以外の安心できる場所となった。」「参加した最初の頃は学生さんとのやりとりを楽しんでいましたが、最終回にはお友だちや月齢の小さい子に興味をもっていた。」「始めは親から離れるのに少し戸惑っている感じがありました。友達におもちゃを取られてもきょんとしていましたが、次第に取られたことに怒ったり、取り返しに行ったりするようになりました。」「受け身の赤ちゃん時代をへて、人見知りの時もあり、最終回には親から離れて自分で遊びに行く姿を見て驚いた。赤ちゃんサロンに行つて初めて気付く発見もありました。」「成長するにつれ、用意されている手作りおもちゃで楽しめるように

なった。」というものであった。

家庭等での様子の変化については、「一つのこと集中して取り組めるようになってきた。」「サロンに参加した日の午後は子どもの笑顔が多くみられた。」「サロンにあったペットボトルにどんぐりを入れて音がなる楽器を家で作って持たせるととても喜んでくれた。」「音の出るおもちゃに興味をもつようになった。自分からおもちゃを取って積極的に遊ぶようになった。遊んでいる自分をアピールするようになった。」というものであった。

家庭と異なる子どもの姿の発見については、「子ども同士のやり取りの中で、他の子に「どうぞ」のやり取りをしていたのが、家での自己中心的な様子と随分ちがっていた。」「昼食の時みんなと一緒に食べることで、自分で食べたいと思う気持ちが出ていた。」「家では感じることでできない刺激をもらえた。」などの記述がみられた。

⑥ 家での好きな遊び

「お家での好きな遊びについて教えてください。」という質問に対して自由記述回答を求めた。その結果、最も多かったものは「絵本」(67.9%)、続いて「スキンシップ・体を動かす遊び」(53.6%)であった。これらは、0から1歳児の子どもたちの遊びのスタンダードといえる。さらに「おままごと」(32.1%)「歌う・楽器・音のでるおもちゃ」(32.1%)「お絵かき」(25.0%)「ブロック・積み木」(21.4%)「車など」(10.7%)が続いている(表5)。「外遊び」は10.7%と、「TV・DVD」と並ぶ。そして1名ではあるが「通信教育教材」を挙げている保護者もいた。遊びの内容としては、現代社会の中で子育てをする環境を考えると、理解できる結果ともいえる。

表5 家での好きな遊び(保護者評価)

家での好きな遊び(保護者評価)	度数(n=28)	パーセント
絵本	19	67.9
スキンシップ・体を動かす遊び	15	53.6
おままごと	9	32.1
歌う・楽器・音のでるおもちゃ	9	32.1
お絵かき	7	25.0
ブロック・積み木	6	21.4
車など	3	10.7
外遊び	3	10.7
TV・DVD	3	10.7
通信教育教材	1	3.6

ただ一つ気にかかる点は、好きな遊びのバリエーション数が少ないことである。上記の遊びを一人の保護者がいくつ挙げているかを「遊びのバリエーション数」と捉え計算すると、2つの時点で約半数、3つになると8割近い保護者が該当する(表6)。バリエーション数が少ないことが問題といえるわけではないが、サロンの30分の

活動の中で保育者と子どもが向き合い遊ぶ場合には、多くの子どもが多数の遊びを展開する。家庭では子育てと家事を切り盛りしながら子どもと遊ぶことになり、合間の時間で遊べる絵本やスキップの回答が多くなるのかもしれない。また、子育て支援が充実し、0・1・2歳児が遊びに行くことのできるイベントや子育て支援センターが充実した結果、自宅で保護者とじっくり遊ぶ時間が少ないという実情もあるのかもしれない。

表6 好きな遊びのバリエーション数

バリエーション	度数(n=28)	パーセント	累積パーセント
1つ	5	17.9	17.9
2つ	8	28.6	46.4
3つ	9	32.1	78.6
4つ	4	14.3	92.9
5つ	1	3.6	96.4
6つ	1	3.6	100.0
合計	28	100.0	

⑦ 赤ちゃんサロンへの要望

「今後、赤ちゃんサロンをよいものにしていくために、アドバイスをお願いします。」という質問項目で自由記述の回答を求めた。何も記述していない回答なしが1名であった。その他27名の保護者の記述は、「要望」という強い主張のものではなく、個人的な希望として記述されているものが多かった。自由記述の回答内容を1文に1つの内容となるように分化し、その内容を概念化して観点として抽出し、再分類した。抽出した観点は、「プログラムの内容に関すること」「学生指導への参画」「回数を増やす」「外遊びの希望」「駐車場・アクセス」「サロンの重要性」「母親同士の交流」「母親向けの講演会」であった。最も多く出現した内容は、「プログラムの内容に関すること」(35.7%)であった。続いて、学生のかかわりやあり方への助言等が記述された「学生指導への参画」(21.4%)、サロンの開催を月1回から変更する「回数を増やす」(17.9%)、もっと外遊びを増やしてほしいという「外遊びの希望」(14.3%)、大学内での駐車場等の物理的問題「駐車場・アクセス」(14.3%)、「サロンの重要性」(10.7%)であった(表7)。また1名ずつではある

表7 赤ちゃんサロンへの要望

赤ちゃんサロンへの要望	度数(n=28)	パーセント
プログラムの内容に関すること	10	35.7
学生指導への参画	6	21.4
回数を増やす	5	17.9
外遊びの希望	4	14.3
駐車場・アクセス	4	14.3
サロンの重要性	3	10.7
母親同士の交流	1	3.6
母親向けの講演会	1	3.6

が、他の母親との積極的な交流を望む「母親同士の交流」、教員による「母親向けの講演会」の希望もあった。

ここで、複数名の保護者が回答している「プログラムの内容に関すること」と「学生指導への参画」について、具体的な回答をみておく。

「プログラムの内容に関すること」では、「季節や行事にちなんだテーマや何か一つテーマを決めて、それに沿った遊びをするものいいかな。」「学生さんが手遊びをしてくれる時間がたくさんあっていいなと思った。」のように、サロンの活動内容をより充実させるものが多く見られた。さらに「家ではあまりできない遊びをしてほしい」「家庭ではできないような遊びも取り入れてほしい」「自然のものを使った工作など家では難しいことができれば。」というように、「家庭ではできない遊び」を保護者が希望しているものも複数あった。これは、「親子でのものづくり。毎回何か一つ作ったりして、思い出作りや、何かを作ったという充実感を得られる。」などにも見られるように、赤ちゃんサロンに日常とは異なる「特別な時間」としての意味を、目に見える形で経験したい保護者の思いが想像される。「リトミック。」「楽器を使った手遊びやリトミック。」というように、大学でのサロンに対して特別カリキュラムを求めることにも繋がっている。そのほかにも、「パパも参加できるような回があればいいな。」のようなものもあった。

「学生指導への参画」については、「学生さんから親子でできるような手遊びや歌なども教えてほしいな。」や「赤ちゃんの食事を手伝ってくれると余裕ができる。」など学生にして欲しいことが記述されていた。他にも、「手作りおもちゃをみんなに紹介するようにしてもいいのかなと思った。」「学生さんの感想などを聞いてみたかった。」「学生さんのこの活動への目的やねらいなどを教えてもらえたら、もっと何かお役にたてたかも。」というように、サロンを計画している学生への教育に対する関心の声もあった。さらに、「学生さんが積極的で素直な子ばかりで安心して遊んでもらうことができた。」など、保育者としての資質にかかわる内容もあった。

4. 考 察

本稿では、2012年度から2014年度まで3年間の赤ちゃんサロンにおける保護者アンケートの結果を詳細に記述してきた。結果をもとに、本教育プログラムについて再考する。保護者による「子どもが楽しんでいたいと思うこと」においては、学生が毎回担当の子どものために準備した「手作りおもちゃ」や「学生とのやりとり」、「プログラム活動の内容」に触れたものが多く、赤ちゃんサロンの活動で力を入れて準備したことが保護者にも伝わっていたことが伺えた。また「保育者のかかわりにつ

いて」、笑顔で優しく接することや名前をきちんと呼ぶことなど保育展開における保育者としての基本的な態度で、子どもと向き合い遊び込んでいたことも評価されていた。そして居心地のよい温かな環境を提供したことで、保護者自身が自分の子育ての振り返りとなったという記述もあり、当初の赤ちゃんサロンの目的としていた「乳児を育てる保護者と未来の保育者が、子どもの遊びや成長の喜びをともに経験し、一緒に学び考えていくこと」を達成できた。近年では、幼稚園・保育所・認定子ども園いずれにおいても、保護者への支援、子育ての支援が重要な要素となっている。本教育プログラムが、乳児を育てる保護者への支援の基盤を学生が学ぶ機会として非常に有効であるといえる。一方、子育て支援活動としての課題も見えてきた。保護者は、子どもの「家での好きな遊び」のバリエーションが少なく、「赤ちゃんサロンへの要望」から、赤ちゃんサロンに日常とは異なる「特別な時間」としての意味を、目に見える形で経験したい保護者の思いも浮かび上がってきた。もちろん保護者の気持ちも理解できる。大学という教育環境の中で、他では味わえない何かを得たいと思い、参加されている。そのことも踏まえながら、保護者に特別ではない日常の子どもの小さな成長を十分に味わってもらえたらと願っている。赤ちゃんであっても子どもは主体的に動き、考え、感じていることに気づき、子どもの発想の面白さや子どもの見ている世界の不思議さに触れてもらうことで、子育ての楽しさを感じてもらいたいと考えている。そのためには保育者が、活動している子どもの姿から、子どもの主体的な動きや考え感じていることを意味づけし、言葉で伝えていくことも時には必要であるといえる。

引用文献

- 1) 田中麻里・大城あゆみ：西九州大学子ども学部における子育て支援活動「子どもミュージアム」の平成21年度から平成23年度の取組み、西九州大学子ども学部紀要，第4号，pp.53－59，2013
- 2) 柳瀬洋美：大学における乳児期・子育て支援グループ活動－親支援・家族支援としての「子育てひろば」－，東京家政学院大学紀要，第50号，pp.1－12，2010
- 3) 吉見昌弘：大学を拠点とした子育て支援活動の展開と課題，愛知教育大学 幼児教育研究，第14号，pp.81－89，2009
- 4) 鈴木方子：子育て支援活動『たっち』に関する一考察，名古屋女子大学紀要，第51号，pp.151－159，2005
- 5) 木村龍平・花園誠・大沢裕・神戸洋子・朝倉恵子：学生の「子育て支援活動」参画における保育実践力の教育効果の検討，帝京科学大学紀要，Vol.8，pp.203－212，2012